



話題の本棚

古賀真輝著『数学の世界地図』

宇和川雄著『ベンヤミンの歴史哲学 ミクロロギーと普遍史』

特集／都市

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



UNIV. 京大生協

綴葉編集委員会

今年の夏は数学の世界を旅しよう

数学の世界地図

古賀真輝著
KADOKAWA



い。基本的な用語や概念は初めに豊富な具体例と共に説明されており、ゆっくり眺めていけばきっと満足のいく旅ができるはずだ。
どんな旅ができるのか?

表紙をめくってすぐの部分を本の「はじめ」といふのじい。普通の本では、タイトルが書かれてあつたり、まつさらな頁になつていて、本書の場合は、世界地図が広がつていて、表紙側に同様のものが描かれているが、その側は紙面いっぱいに描かれており、迫力が段違いである。面食らう人もいるかもしれないが、この世界をこれから旅するんだと思うとワクワクしてこないだろうか。本書はガッチャンチの数学書ではないし、問題集のように無味乾燥な数式が羅列されることもない。平易な言葉と自然な発想で数学の世界を伝えてくれるガイドブックである。

どんな人が誰に向けた書いているのか?

著者は大学在学時からYouTubeに数学解説動画を投稿し、今や登録者は六万人を超える。修士課程修了後、動画投稿を続けながら中学、高校で教鞭を執っている。本書は六七万再生された同じ動画をきっかけに執筆されており、高校生や大学初学年の人が対象だ。雰囲気が知りたければ動画を見てみることをおすすめする。本書を読むための前提知識はほとんど必要なく、多項式やベルトル、積分について知つていれば読み進めることができる。もちろん知らない、あるいは忘れたという人が読めないといつわけではな

い。本書は数学のガイドブックとしては満点だが、更に先に進みたい、自らの足でこの世界を歩んでみたいという冒險者にとっての大きな欠点が一つだけある。参考文献がないことだ。数学の専門書で適切な選書をすることは難しく、心が折れる可能性もある。著者のHPで徐々に作成中とのことですので、楽しみに待つていいよ。(筏)

(三二〇頁 税込三四二〇円 6月刊)

歴史と歴史家へ向けられた新たな視座

ベンヤミンの歴史哲学 ミクロロギーと普遍史

宇和川雄著
人文書院



本書は京都大学に提出された博士論文に基づく重厚な研究書である。その完成から遡る二千数年、学部生だった著者は思想家ベンヤミンの言葉と出会う。その後読書会で彼の『歴史哲学テーゼ』を取り上げた時、ある参加者が問うたそうだ。この（既訳では「一般史」とされていた）Universalgeschichteは何なのか、と。

「普遍史」を指し示す六つの調点

ナチスにより故郷を追われたユダヤ系ドイツ人という素性。現代では必需品となった文明の利器に対する洞察。ヴァルター・ベンヤミンと彼の文章は、今なお絶大な注目を集め、人に何かしらを語らせようとする力を持つ。しかしその晦漫かつ比喩的なテキストは徒な読解に晒されることも少なくない。遺作である『歴史哲学テーゼ』（一九四〇）にしても同様で、著者の宇和川は「上澄みを掬う」事態を避けるため、同稿へと至るベンヤミンの思索遍歴を読み直そうとした。そしてその果てに、「普遍史」の理念が見出された。

全六章から成る考察は、明晰かつ徹底的な一次文献の読解と、ベンヤミン以外の様々な思想家との対決によって特徴づけられる。例えれば、ドイツロマン派を扱った彼の博士論文を分析する際はロマン派の代表者フリードリヒ・シュレーベルの著作が検討され、また思

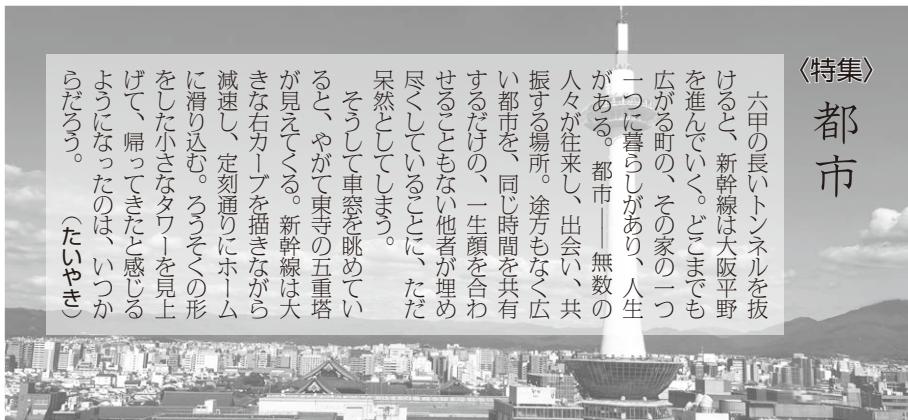
想家の文献学への傾倒を意味つける際は、グリム兄弟に遡りその連續性が証立てられる。そのほか形態、寓意、原型、技術と、依つて立つ文脈をしかと定めるかゆえに、迷いなき論述が読者を導く。

「些末なもの」なしにはあり得ない歴史

けれども、ここで本書の結論をまとめるとは難しく。「普遍史（Universalgeschichte）」の構想を解き明かそうとする著者は、それと並べて彼の「ミクロロギー的方法」にも注意を向ける。それは「神は細部に宿る」という精神に基づく逆説的な思考法である。ベンヤミンの歴史哲学はこのミクロな尺度によるマクロな普遍史の批判、その先にあった。論述を踏まえ「些末なもの」を好む思想家の姿を想像すると、論の要となる岩塊の如き文献読解や他の思想家との格闘と並んで、その間を埋める砂粒のような同時代人の証言が同程度に重要であると感じられ、安直な要約を躊躇ってしまうのだ。

アドルノ、ショーレ、アーレントといった第二次大戦を生き延びた知識人による「き友ベンヤミンの回想は、実際読解の正当性を裏付けるよう機能しており、論の運びには破綻がない。一次文献を引用する際には、例示を駆使した丁寧な語り直しが印象的である。過去のテキストをそのままに自身の論考へと織り込んでいくその手さばきの鮮やかさは、細部まで読んだ者にしか分かるまい。

歴史は無数の人々の生と死に関する記述であり、その書き手が歴史家である。歴史家が歴史をつくるとき、過去の人々と同様に歴史家自身も見逃してはならない。その両者を見据えるという点で、本書は多くの人々に届く可能性を秘めている。（投稿・渡世）



〈特集〉 都市

六甲の長いトンネルを抜けると、新幹線は大阪平野を進んでいく。どこまでも広がる町の、その家の一つ一つに暮らしがあり、人生がある。都市——無数の人々が往来し、出会い、共振する場所。途方もなく広い都市を、同じ時間と共に走るだけの、一生顔を合わせることもない他者が埋め尽くしていることに、ただ呆然としてしまう。

そうして車窓を眺めていると、やがて東寺の五重塔が見えてくる。新幹線は大きな右カーブを描きながら減速し、定刻通りにホームに滑り込む。もうそこの形をした小さなタワーを見上げて、帰ってきたと感じるようになつたのは、いつからだらう。（たいやき）

〈都市〉なるもの——その経験の地平——

京都という〈都市〉で暮らすようになつて六年目になる。一日にバスが一〇本もないような地方のはずで生まれ育った評者にとって、大学進学を機に出会った〈都市〉は恐ろしいものだった。時刻表を事前に確認する必要もないほど、続々とやってきて大量の人を吐き出す電車とバス。読み方も知らない店と人々が飲み込まれる四条通。深夜の木屋町の喧噪……。〈都市〉での正しい振舞い方を身につけていないが故の場違いさや戸惑いの感覚が抜け切るまで、数年は要しただろうか。

しかし評者が最も懐いたのは、こうした〈都市〉に対する違和感は、大学で出会った友人の大半にとって自明ではなかつたことだ。都會育ちの彼らは、〈都市〉の空氣を当たり前のように吸つて吐くことができていた。〈都市〉なるものはきっと、人間が迎ってきたそれぞれの経歴に応じて異なる形で立ち現れるのだろう。まずは、この社会的空間で人々が取り結ぶ多様な関係がいかに交錯し絡みを為しているのかに、ついて考えてみたい。

北田暁大の『増補 広告都市・東京 その



誕生と死』（ちくま学芸文庫）は、〈広告メディア—消費社会〉のトライアングルとして〈都市〉を捉え、その変遷を解剖する。〈都市〉自体が広告の舞台となり、我々のアイデンティティ装置として機能した八〇年代。それは他者から「見られているかも知れない」というパノプティコン的な不安がリアルな時代であった。しかしその年代半ばには、過剰なつながりを求める携帯電話というメディアの登場によって、八〇年代の〈都市〉の前提であった既存のマスメディアの論理が溶解する。〈都市〉が単なる情報アーカイブへと変容した現在、我々の現実は他者から「見られていない」という欲動——に駆り立てられている。もはや古典の仲間入りを果たした本書は、SNSの発達といった近年の論忘を含めてはいない。しかし評者は、本書の分析視角の鋭さは現在もなお失われていないと考える。現代の〈都市〉に生きる我々は、インスタなどの広告的メディアに導かれ〈都市〉へ向かう、その光景をまたSNSに上げる。本書は自己増殖する広告メディアと我々の欲望の関係について考える手掛かりになるはずだ。

『ガールズ・アーバン・スタディーズ「女子」たちの遊ぶ・つながる・生き抜く』(法律文化社)は、例えばイルミネーションを観に行くこと、女性一人だけでは牛丼屋へ入りにくいこと、通勤通学の際に痴漢から自衛しないといけないこと……など、都市に生きる女性の身近な経験に目を向ける。これらが「当たり前」とされる女性の目に映る「都市」は、おそらく男性のそれほど大きく異なるだろう。〈都市〉とは単に物質的・客観的な水準のみに存在するものではない。それはむしろ、私たちが〈都市〉として理解し、実践するイメージや経験の地平にも広がっている。女性だけではなく、ぜひ男性にも(男性だからこそ!)手に取ってもらいたい良書だ。

さて、〈都市〉の内部を覗き込んで話を進めたが、それでは視野が狭くなつて全体像を見誤りかねない。むしろ〈都市〉とは何で、ないのかを考へることでかえつてその輪郭が明瞭になるだろう。ここで〈都市〉と対置される概念である〈地方〉について考へるためにの一冊を紹介しよう。

『再考 ファースト風土化する日本 変貌する地方と郊外の未来』(光文社新書)は、ファースト風土化した——全国のロードサイドに



大型商業施設が建設され、マクドナルドのよう均質的な消費空間に地域固有の風土を奪い去られた——地方と郊外の展望を示す。〈都市〉と〈地方〉は決して二項対立的なものではない。その内実は多様である。小説家や建築家を含む総勢一三人による論考者は、「ファースト風土」化を経由した、〈都市〉と〈地方〉の現在地を把握し、将来を構想をし

ていくための大きな手掛かりになるはずだ。〈都市〉なるもの。それは時代によって移り行くメディアや、ジエンダーや出身地など属性によって多様に取り結ばれる経験の地平に立ち現れるものなのだろう。今回取り上げた書籍はいずれも、〈都市〉に生きて呼吸をする私たち人間の現実、その経験の質感への感度を増してくれる。

(浅煎り)

何のための、誰のための都市?

なるほど、都市はそこに生きる人々の生活の総体として立ち現れる。一方で、都市は、

人々をある一定の方向に駆り立てるエネルギーを持つ。それではあなたは、どのような社会の、どのような生活を望むだらうか? これから都市について考へることには、あなた自身の未来を考へることにつながる。

都市は「手段」か? 「目的」か?

まず紹介したいのが『都市をたたむ』(花伝社)。「都市は何のためにあるのか?」と著者は問いかける。都市はそもそも、豊かな生活をするための「手段」であった。しかし、いつの間にか、都市を維持すること自体が

本書が提案するのは、「都市をたたむ」都市計画である。それは縮小していく都市に合わせて暮らしを変化させつつ、しかし人々が主体的に都市を使つていくための計画だ。

具体的に紹介される事例は「空き家活用まちづくり」「ランドバンク事業」など、今まで嫌というほど耳にするような計画である。

しかし当たり前の潮流となりつつあるこれら
の計画が、どのような意味を持ちどこに向か
って行こうとしているのか、理解することに
意義がある。事業そのものが目的化しないた
めに、都市の大きな力に呑まれないために、
私たちはどうな都市を築むのかと、問い合わせ
ることの大切さを教えてくれる一冊である。

「集いの場」は都市から消えたのか

より身体的に、実践的に都市の未来を考え
るなら、『未来都市は「ムラ」に近似する』（彰国
社）を読んでほしい。著者は、近代化が「ムラ」と
都市の分離を推し進めてきたと。そして都市の縮小が進む今こそ、都市を「ムラ」
に近づけていくチャンスだと述べる。

かつて日本の都市には、所有の曖昧な空間
「コモンズ」が存在した。例えば明治初期の
神社を中心とした自然集落では「市」や「祭
り」などが開催され、宗教施設を超えたコミュニティのための場所として機能していたの
だ。このようないい小さな経済圏によって成り
立つ地域コミュニティ（＝「ムラ」）を都市
に組み込むべきだと著者は主張する。

人口減少により局所的に都市が低密度化する
「ズボンジ化」を逆手に取って、空地を活用
した「コモンズ」を生み出せないか。本書は
著者の建築家としての試みも紹介される。例
えば、東京都江東区の「HYPERMIX」。

上層階にオフィスや居住空間があり、一階部
分に都市に向けて開かれた大空間が設けられ
ている。著者は言ふ、「建築とは、身体的に
共同体への参加を感じる『場』をつくる技術
である」と。隣に誰が住んでいるかわからな
い都市的な住居と、人々が集い関係を築いて
いくムラ的な広場が一つの建物に混在してい
る試みは未来的で、興味深い。

しかし、これまでコミュニティが希薄な都
市で生活してきた現代の人々は、果たして自
ら「ムラ」を作れるのだろうか？ 「商業空間は
何の夢を見たか」（平凡社）によれば、そも
そも日本的な広場とは、空間的に囲われた場
所ではなく、集まる人間の主体的な行動によ
つて立ち現れるものであるという。本書は、
政治的・文化的連帯を禁じられ「日本の広
場」を失った人々が、消費を媒介して集うよ

り、現在、新宿駅西口では再整備が進められてい
る。名建築を解体して作られるその空間は、私
たちにどんな未来をもたらすのか。読書をき
っかけに、考えてみようはどうだろうか。（荒瀬）

そして、地球全体が都市化する時代に

東京、上海、デリー、ジャカルタ、マニラ

——日本都市が縮小と再編を迫られる一方、

論的転回の潮流に、その手掛かりを見たい。

資本主義による都市空間の不均衡発展

世界の都市は空間的に拡大し膨大な人口を吸
収している。そんな現代において私たちは都
市とどう向き合うか。ここでは都市の「空間
性」に着目した近年の都市研究における空間

うになる過程を描く。

六〇年代までの日本の都市では、政治を中心

に入々が集っていた。例えば一九六九年の
「新宿西口」地下広場。紙面いっぱいに広がる、

フォーグリラの写真が印象的だ。車道に溢
れかえる人々の熱気が、ムンムンと伝わって

くる。現在その場所は「新宿西口」地下通路へ
と名前を変えて、集まることを禁じている。

人々から「集うこと」を奪ってきた代償は
大きい。現代の都市は、レンタルスペースのよ
うに商品化された空間で溢れている。道端の
公園すら禁止事項が増え、安心・安全と引

き換えに行為が限定されている。

名建築を解体して作られるその空間は、私

たちにどんな未来をもたらすのか。読書をき

っかけに、考えてみようはどうだろうか。（荒瀬）

マルクス主義地理学者デヴィッド・ハーヴェイが、オスマンによる都市改造計画で知られる十九世紀パリの状況を歴史・地理的視点で記述したのが『パリ モダニティの首都』(青土社)である。本書においてハーヴェイは、マルクスの「フェティッシュ(物神)」——商品の交換において物の背後にある社会関係が隠蔽されること——の対象として都市を見る。つまり物質的景観や建物として都市が目の前に現れることで、背後にある社会的意味が隠蔽されているということだ。本書はパリにおける空間、金融、労働、文化の変容の過程や連続性に注目し、物質性に隠蔽された社会的意味の解明を試みる。

大量の図版や史料、文学批評から構成される本書だが、根底にはハーヴェイの地理的思想が垣間見える。過剰資本の蓄積を避けるため建造環境へ投資が行われ、都市空間が不平等を孕みながら不均衡に発展するという空間的回避の概念に、オスマンによるパリ改造はあてはある。その意味で本書は、パリの事例研究を通じた、ハーヴェイの主張する「資本主義の危機」理論を提示した一冊と言える。

現代都市における空間の再編と複雑化

先進諸国にとって七〇年代は、福祉国家の縮小と工場の海外移転によって都市が変容してゆく時代だった。そして八〇年代、サービ

ス経済への移行による都市再編のたたなかにあつたロサンゼルスを対象にした都市研究群が出現する。政治経済活動と都市の空間性の関係を論じた彼らはLA学派と呼ばれた。

その中でも存在感を放つのが、精肉工場員やトラック運転手といった異色の経歴を持つ地理学者マイク・デイヴィスの『要塞都市』(青土社)だ。二〇世紀しLAの光と闇が交錯する混沌の都市史が、ドキュメンタリ調の淡々とした筆致で描かれる。表題の章「要塞都市しLA」ではゲートッド・コミュニティの建設を取り上げ、中産階級の過剰な防衛本能により生まれた人権抑圧的な監視と空間的分離が、しLAの建築環境を構成していることを明らかにする。ほかにも、ストリートギヤングの貧困や失業、郊外化、宗教といった断片的な都市の一面を記述していくことで、(小さな物語が無数に生み出される時代としての)ポストモダン都市しLAの全貌が暴かれ

る。本書で描かれているような、脱工業化とグローバル化の中で多様性と複雑性を増す都市は、今や全世界に広がっているだろう。

そして、地球全体が都市化する時代に

最後に都市研究の現在地をちらり。『惑星都市論』(以文社)は氣鋭の都市研究者を



中心に編まれた論文集だ。表題の由来であるニール・ブレナーらのプラネタリー・アーバニゼーション(PU)研究は、定められた空間的領域を持つ都市という、従来の都市論の枠組みの刷新を目指している。なぜなら都市化は人が居住する領域を超えて、農業・工業生産、物流、廃棄物処理などのインフラを担う非都市的な「後背地」にも変容を及ぼし展開しているからだ。本書はPU研究の主題であるスケールとインフラ、更に現代都市研究における一つの中心であるポストコロニアル都市論やアクターネットワーク都市論などのトピックについて、最新の議論を紹介する。

本書は都市を理解するための普遍的な理論や知の構築を目的としていない。地球全体が都市化する時代において、経験に裏づけられた認識からボトムアップに都市を思考するための問題提起が、ここになされているのだ。

*

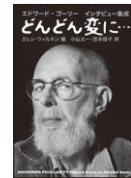
都市は無意識のうちに我々を内包し、様々な問題もないまぜに、たゞそこに存在している。本特集では、都市に生きる人びとや都市を主体的につくること、都市の空間性といつた多様な視点から、都市を捉えようとしてきた。本特集が読者にとって、自らの生きている都市を再考する道標になることがあれば、それが評者一同の本望である。(たいやき)

新刊コーナー

どんどん変に…

エドワード・ゴーリー著 カレン・ウィルキン編
小山太一／宮本朋子訳 河出書房新社

先月号の『綴葉』
の企画「ゴーリー病
にご注意を！」は、
お読みいただけただ
ろうか。まだの方はぜひ。ここでは先の企画
に関連して、絵本作家（と限定はできない
）のエドワード・ゴーリー、どう人、物に焦
点を当ててみたい。二〇〇三年、ゴーリーの
死の三年後に編まれたインタビュー集が、今
春、装いを新たに出版された。



また然り。「アイディアのたくわえは、今にも
崩れだしそうな薪の山ぼうじる」。だがその
アイディアが結実した彼の作品は、実に意味
不明なのが多い。「できるだけ意味を持たな
いものを書く傾向はたしかにあると思います。
昔から、意味のないものを書くという考え方
がこれまででね」。彼は続ける。自身の読
者層は「たぶん、一般よりも『ソフィスティ
ケート』された人たちじゃないでしょ? うか
——それがどういう意味かはさておいて」と。
丸眼鏡の奥でニヤリと笑う目と、微かに揺れ
る密林のひと妻顎髪が目に浮かぶ。（はらん）
(一七二頁 税込二七五〇円 4月刊)

都会のトム&ソーヤ
トム vs. ソーヤ 20

はやみねかおる著
にしけいこ絵 講談社

目が覚める。伸び
をする。歯を磨く。
学校に行く。友達と
話す。いつもの日々。



大のインタビュー嫌いを自称したゴーリー
だが、実状は少し違う。自身の知識と関心の
レベルに見合わない質問に、彼は辟易した。
知識量が膨大であるがゆえに。一度心を掴ま
れると、没頭せずにはいられない性質らしい。
ニューヨーク・シティ・バレエへの偏愛と造
詣の深さが最たる例である。リハーサルと朝
晩全ての公演を観に行つたというのだから。
多方面への好奇心は一方で、彼に間断ない
い閃きを与えて続けた。文学への強い愛情も
（ハイジ・ヒューリック）

そこで目を覚ます。あれ、今までのは夢
……？ 伸びをした時の気持ちよさも、友達
の笑顔も、おはよの声も、確かにそこにある
ったのに。じゃあ今見ているのが夢……？

建築物に入ることに。しかしそれは創也の実家
である童玉グエループの持ち物だった。しかも
侵入者対策に創也が関わっていた！ 内人の
サバイバル能力と創也の裏作りもといゲーム
メイキング能力、どちらが勝つか？
ゲームの行方は「神のみぞ計」！ さあ、尋
常でなく樂しく、恐いぐらい魅力的な赤い夢の
中へ。Good Night, And Have A Nice Dream.（轟丸）

今回の世界はどうして現実だと言えるのだろう。
あなたはそう考えたことはあるだろうか。
私はたまに、今どちらにいるかわからなくな
る。なんだか頭がぼんやりして、この世界は
誰かの見ている夢じゃないかと考えるのだ。
赤い夢。はやみねかおるはこの現実と夢の
あわいをそう呼ぶ。彼の書く物語に通底する
概念だ。『都会のトム&ソーヤ』シリーズも
然り。この三月にじゅうじゅう一〇巻目を迎え、
あの頃も今も「子どもたち」をずっと楽しめ
せ続けている本シリーズ。「ふつう」だけれ
ど並外れたサバイバル能力を持つ内藤内人と
秀才かつ御曹司かつ猪突猛進な童王創也は今
も変わらずゲーム作りに励んでいる。参加者
に「赤い夢」を見せるようなゲーム作りに。
一〇巻では、タイトル通り内人と創也が対
決する。小学校の同窓会に参加した内人は、
タイムカプセルを探すため山奥の不気味な建
築物に入る。しかしそれは創也の実家
である童玉グエループの持ち物だった。しかも
侵入者対策に創也が関わっていた！ 内人の
サバイバル能力と創也の裏作りもといゲーム
メイキング能力、どちらが勝つか？

(110四頁 税込二三三〇円 3月刊)

文庫の読書

荒川洋治著
中公文庫

文庫が好きだ——
と、突然愛の告白
をしてしまったが、
とにかく私は文庫が
好きなのだ。まず文庫はポケットに入れて持ち歩ける。だから散歩のお伴にはぴったりだ。
散歩に疲れたら、ポケットからすっと取り出して、休憩がてら読み始めればいい。次に文庫はその小ぶりなサイズゆえに、読めば読むほど手になじむ。そして愛着が湧いてくる。
それは「私」だけの大切な一冊となる。要するに文庫は、良いこと尽くめなのだ……！

「文庫の読書」と題された本書の「あとがき」には、こんな一節がある——「読み終えたあと、柔らかくなつた紙の感触もいい。読んだ。確かに読んだ、しっかり読んだ。そんな気持ちになる。それが文庫だ」。本当にその通りだと思う。これを書いたのは、現代日本を代表する文芸評論家の荒川洋治。私と同じく彼もまた、「文庫大好き人間」のひとりだ。本書は、そんな文庫を愛してやまない荒川によって書かれた、文庫をめぐる選り抜き

ルネサンス文化講義
南北の視座から考える
澤井繁男著
山川出版社



本書は、著者澤井

の一二年間に渡る講義録をまとめた書である。ルネサンス

文化に親しむ」と題されたその講義は、いわゆるパンキヨーの科目であった。澤井は講義後、質問や感想をコメントペーパーに書かせていました。本書の後記には、それが「だんだん

のエッセイをまとめた珠玉の一冊である。国木田独歩、葛西善蔵、武田百合子、ブーシキン、ショトルム、カルヴィーノ……本書では古今東西の作家が縦横無尽に論じられるが、「荒川マジック」とでも言うべきか、まったく興味のなかった作家でも、荒川の手にかかるとあら不思議、どうしようもなく読みたくなる。たとえばチャーホフの短編「学生」について、「このような小説があるために、人は生きていくのだ。そんな気持ちになる」。こんなことを書かれたら、もう読むしかないだろう。本書は読書欲増進剤だ。（ぱや）

(三二〇頁 税込九九〇円 4月刊)

読むに耐えないものに悪化していった。これも時代の趨勢かとも思った」と記されている。澤井は本文でも度々、昨今の学生の質の悪化を憂いでいる。本書を読めばその憂いにも共感できよう。ルネサンスという深遠なる知の世界を見つめる者には、浅薄な知が氾濫した現代世界は許し難いものに映るのだろう。

講義録とだけあって、各章はコンパクトだが明瞭にまとめられている。さらに、参考資料に邦文文献が挙げられているのもありがたい。全二〇個のテーマには、「天地照應」や「から多へ」という思想史的切り口に始まり、「民衆生活」や「女性蔑視」といった歴史学的視点、さらには「気候変動」や「科学革命」といった、理系学生の方々にも興味深い観点が盛り込まれている。とはいって、一見すると文学や芸術とは無関係に見えてこれらのこと象をも、当時の人々は神の恩寵と罰という観点から解釈し、作品へと落とし込んだというから、やはりルネサンスは興味深い。

また、著者がルネサンス魔術研究の第一人者であるがゆえに、「自然観の推移」と「魔女狩り」の章は必読だ。実態の捉え難いこれらのテーマにはしかし、質と量、都市と農村といったルネサンスという時代を把握する上での重要な対立構造が潜んでいる。（はらん）

(二四〇頁 税込二二〇〇円 4月刊)

イン／ポライトネス —からまる善意と悪意

滝浦真人／椎名美智編
ひつじ書房



ある一言を言うか
言わないか。言うな
らば、どの単語を使
いるか、文の形はどう
するか……。いじばを用いた他者との関わ
りは選択の連続である。そして、度重なる選
択の上に成り立つ発話（または発話しないこ
とに含まれる意味を受け手は推論する。こ
のような実際の言語使用に焦点を当てるのが
語用論という言語学の一分野である。

「社交的な『ふるまい』と説明される「ポ
ライトネス」に否定の接頭辞を付けたたらそれ
はポライトネスの失敗を意味するのだろうか。
否、本書はそれを別次元の行為と捉えている。
インポライトネスには感情的で意図的な「失
礼」や「悪意」も含まれるのだ。体系的敬語
を持つ日本語では、ポライトネス研究が盛ん
な一方で、インポライトネスについては、本
書がその名を冠する書籍第一号だという。言
語学に興味を持つ人ならぜひ読んでおきた
い一冊だ。しかし、本書は「専門分野の学術
書に留まる書籍ではない。「言葉の暴力」に

ある一言を言うか
言わないか。言うな
らば、どの単語を使
いるか、文の形はどう
するか……。いじばを用いた他者との関わ
りは選択の連続である。そして、度重なる選
択の上に成り立つ発話（または発話しないこ
とに含まれる意味を受け手は推論する。こ
のような実際の言語使用に焦点を当てるのが
語用論という言語学の一分野である。

—転、創造的可能性がみえてくる。(ひるね)
(一七)頁 税込三七四〇円 4月刊)

「ゴースト・ワーク グローバルな新下層階級をシリコンバレーが 生み出すのをどう食い止めるか

情報技術の発展が
業務を自動化し、人
間がやるべき仕事
(とりわけ単純労働)



は失われていく。ウェブサービスは、クリエ
イティブな才能を持つわずかな人間によって
生み出されている……。本書の綿密な調査は、
こうしたイメージに待ったをかける。

(四四八頁 税込三四二〇円 4月刊)

に対する本書の姿勢を示す序論は多くの人に読
んでもらいたい。続く各論考の語用論的分析
からは言語学者のことばの見方が窺える。言
語は状況を持つ。つまり一度発したことは
は消えない。だからこそ、たとえ言語学者で
なくとも、ことばを分析的に捉える言語学的
視点を知ることには意義がある。

しかも本書は面白い。ママ友の会話やテレ
ビの毒舌キャラの発話を分析し、なぜ気分を
害するのか、逆になぜ親しみを覚えるのかを
語用論的に考える。すると言語の負の側面が
一転、創造的可能性がみえてくる。(ひるね)

—転、創造的可能性がみえてくる。(ひるね)
(一七)頁 税込三七四〇円 4月刊)

本書のタイトルである「ゴースト・ワー
ク」は、文字通り幽霊のようにAIを陰で支
える仕事だ。ワーカーたちは自宅から専用ブ
ラウザフォームにアクセスし、仕事を探す。
そして画像に写る家具の名前を入力したり、
SNS上の不適切な画像を選別したり、証明
書の顔写真を照合したり、録音の音質を評価
したり、動画の音声を翻訳して字幕を作成し
たりする。現在の「自動化された」プログラ
ムはあまりにも間違いが多く、人間の柔軟な
判断力と手作業がなければ成り立たないのだ。
問題は、ゴースト・ワークは情報産業に必
要不可欠な仕事であるにもかかわらず、その
地位や安定性が著しく低いことだ。彼らは世
間からも企業からもまるでプログラムの一部
のよう扱われる、労働法による保護もほとんど
受けられない。仕事環境を改善したり仕事
を教えるたりするコストは、ワーカーコミ
ュニティの自助努力に押し付けられている。

産業革命の時代には、体躯が小さいからと
いう理由で子供が紡績機械の糸くず扱いに重
宝された。こうした「自動化のラストマイ
ル」を担う人々は、新しい技術が世に出たた
びに生まれ続ける。AI生成物が話題の昨今
だが、「AIが作る仕事」についてもより関
心が向けられるべきだわ。(りつち)

「テロとの戦い」との闘い

高岡豊著

東京外国语大学出版社会

一〇〇一年九月一日……信じられない光景が目に飛び込んできた。飛行機が超高層ビルに刺さっているのである。この事件が発生した後に生まれた読者もいるだろうが、この事件のことは誰もが知っている。アメリカ同時多発テロ事件以降、アメリカが主導する「テロとの戦い」が始まった。



「テロとの戦い」との闘い

この事件が発生した後に生まれた読者もいるだろうが、この事件のことは誰もが知っている。アメリカ同時多発テロ事件以降、アメリカが主導する「テロとの戦い」が始まった。

増補 もうすぐやつてくる
尊皇攘夷思想のために岩波現代文庫
加藤典洋著

加藤典洋——彼は日本の批評界で特異な位置を占めている。

激しい論争を巻き起

増補 もうすぐやつてくる
尊皇攘夷思想のために
岩波現代文庫
加藤典洋著

組織ごとの活動変遷に沿って解説している。同時に、それぞれの組織の広報活動についても分析が行われている。組織は国外から活動要員を集めるために、自らの日常生活に関する情報を発信していた。本書にも写真と共に載っている。本書の様子が掲載されており、遠く感じるテロリストを少し身近に感じる。また、世界各

地に影響を与えていた組織は、支部の所在地によって生活様式もまるで統一されていない。

食卓ひとつを取っても、食材の調達方法から調理方法まで、地域によって多種多様である。

この本を手に取る以前に、「テロ」や「イスラーム過激派」を説明するイスラームについての専門的な単語や固有名詞などの多さに敬遠してしまう人もいるだろう。評者もその一人である。そのような読者のために、本書ではイスラーム特有の表現や文化などについての小辞書の項目が最後に掲載されており、内容を格段と理解し易くしている。(アラチ)

(一四八頁 税込一四二〇円 3月刊)

た。左っぽいことを言ったかと思えば、右っぽいことを言つたりもする。いったい彼はどうらの立場に与しているのか——そうした疑問が、私の頭の中ぐるぐると渦巻いていた。

しかし、その疑問は本書を読んで解決した。ようと思つ。本書には、尊皇攘夷思想の現代的意味を再考した論考や、鶴見俊輔との交流を回想したエッセイなど、加藤がこれまで書き溜めてきた文章が多数収録されている。だが、その中のあるひとつの中において、加藤はこう書いている——『私は「……」とにかくどんなことが起こっても、これだけはぼくは本当だと思う、ということが、最後には考えることの足場になる』という思いを深めてきました。加藤はつまり、左でも右でもなく、「ぼく」という場所から言葉を紡いでいるのだ。既成の立場から発言するとき、その発言はイデオロギーへと凝固せざるを得ない。それゆえ加藤は「立場」というものを峻拒する。ここに加藤の魅力がある。

「ぼく」の感覚を大切にし、そこからものを考えてゆくこと。これは本当に大事な姿勢だと思つ。「それってあなたの感想ですよね」という言葉が膾炙する昨今だが、私はそれに對して、「あなたの感想」はとても大切なかけがえのないものなのだと言いたい。(ぱや)

(五四二頁 税込一九五八円 2月刊)

〈ほんもの〉という倫理 近代とその不安

田中智彦訳 チャールズ・ティラー著
ちくま学芸文庫

ほんものという倫理
——おそらく聞き
馴染みのない概念だ
らうが、実は既に私
達の中にあるものだ。「人様のまねをするの
ではなく、自分なりのやり方で自分の人生を
送ることがこのわたしに求められているのだ」

という感覚。この、ほんものを理想として志
向する態度が、本書の鍵となる概念なのだ。

政治哲学の大家である著者はこのほんもの
という倫理に注目して、近代の没落がその批
判者、という対立構図に切り込んでいく。近
代、そして現代には確かに、個人主義と道具
的理性の浸透によって、ナルシシズムの文化
が蔓延している。しかし著者曰く、これは個
人主義の背景にある思想——ほんものという
倫理——が、堕落し逸脱した形態に過ぎない。
彼は自らの立場を、この道徳的理想的の価値
を無視する批判者からも、また現代文化にの
めりこんでいる人々からも区別する。「わた
したちがしなければならないのは、このほん
ものという理想を回復する作業であり、また



そうすることによってこそ、わたしたちほど
の理想の助けを借りて、自分たちの実践を立
て直すことができるようになるのです」。

彼はほんものという倫理の全貌を示すため、

思想史を辿り、政治や芸術をも題材として芳
醇な議論を繰り広げる。そして、近代の不安
の原因を紐解き、理想を回復するための実践
を呼びかけ続けるのだ。原書は一九九二年に
刊行されたものだが、その洞察は現代にも突
き刺さる。立場が明確で批判に開かれた彼の
議論を伴走者とし、「ほんもの」の価値の源
泉を見つめ直してはいががだらうか。(朝露)

(一五六六頁 税込二二〇円 3月刊)

生きることの意味を問う 哲学

森岡正博 対談集
森岡正博著 青土社

「生まれてこない
ほうが良かつたの
か?」という問い合わせ
ある。デイヴィッド・ベネターによつて分析哲学の祖上に載せ

られ、本書の著者・森岡の同タイトルの著作
によって体系的に検討されてきた問題だ。人

間は生まれてこるべきではなく、また新たな
命を生むべきではないという思想を反出生主
義と言い、俗流化したものを持める、イン
ターネット上の言論やフィクションの題材と
して確実に浸透してきている感がある。

本書は反出生主義を含む「人生の意味の哲
学」を切り開かんとする著者が、四人の若手
哲学者との対話を通じて「哲学すること」自
体に迫つていく対談集である。著者にとって
の哲学は、過去の偉大な哲学者のテクストを
一字一句解釈することでもなければ、純粹に
知識的な論理パズルを解くことでもない。「私
は生まれてこないほうが良かつたのではない
か」。生命の哲学と云は、「この私の命」を前提
とした私的で実存的な問いを抱えたまま、現
在や過去の哲学者と真摯な対話を重ねること
の内にあるのだ。著者と非常に近い問題意識
を持つ評者としては、過去の哲学者の研究を
自己目的化するのではなく、己の問いを考え
る偉大な仲間として過去の作品群を読むとい
う著者の哲学スタイルに非常に強く共感し、
これで良いのかとなんだか安心した。

例えば反出生主義について明確な答えを得
ようとして本書を開くと、肩透かしを食らう
だろう。しかし本書の語りは、哲学せざるを得
ない問いを持つ読者へ、自分の問いに飛び
込む勇気を与えてくれる。(りつち)

(二二〇頁 税込二二〇円 4月刊)

我が身を守る法律知識

瀬木比呂志著

講談社現代新書

「自分には裁判沙汰になるような問題は起きない」——そう思っている人にこそ読んでほしい新書がある。それが本書だ。

元裁判官で現在は明治大学教授の瀬木比呂志氏が問題の予防・解決法をひとつずつ丁寧に解説する。本書が扱う問題は交通事故、不動産関連のトラブル、痴漢冤罪、離婚や不貞、相争い、雇用や投資をめぐる紛争、医療訴訟やいじめ、海外旅行など多岐にわたる。例をひとつ挙げよう。一般人が遭遇しやすく泥沼化しやすいものに無償契約の使用貸借がある。主に使用期間に関する認識の相違と契約者間の人間関係悪化により問題が生じる。これを未然に防ぐには、契約時に使用期間を定めるのが大事だという。当然の対処法に思えるが、それができない人が多いようだ。このように他の問題も敷衍してくれる。著者は「実証的で冷徹なりアリズムの不足」ゆえに個人でも社会・国家レベルでも危機管理ができる、問題が発生すると本書で主張する。法律知識を身に付け、リアリズムを徹底し、将来的自分をどうか守って。(前髪)

(一五八頁 税込二〇〇円 3月刊)

物語 チベットの歴史

石濱裕美子著

中公新書

チベット——平均標高四一〇〇mの広大な地域である。現在は中華人民共和国の中の自治区として存在しており、チベット仏教をはじめとする様々な独自の文化を持つ。最盛期には、その勢威は現在のパキスタンや中央アジアにまで及んでいたため、古代ペルシア文化やインド文化、漢文化、そしてヘレニズム文化なども取り入れながらその文化を築いた。

現代の様相からは想像をすることが困難かもしれないが、中国併合以前のチベットは周辺諸国と非常に密度の濃い外交関係を構築していた。八三二年には唐との講和によって国境を画定し、その際に刻まれた唐蕃会盟碑は現在も古都・ラサに残っている。

チベットが中国に併合を余儀なくされた一九五一年以降の歴史を概観する機会はそれなりに多い一方で、本書のように、これ以前のチベットの歴史に触れる機会は非常に限られている。チベット自治区における人権問題に触れる際、そして近年話題になつていてチベット文学などを読む際にも、基礎知識として一冊読んでおいて損はない。(フラチ)

(二八八頁 税込九九〇円 4月刊)

「死にたい」と言われたら 自殺の心理学

末木新著

ちくまプリマー新書

著者によれば深刻に自殺を考えたことがあら人は人口の二～三割にのぼるという。「死にたい」と思うことはそれほど珍しいことでないのだ。しかし、「死にたい」という思いを抱いた時、あるいは相談された時に適切な対処ができる人はどれほどいるだろう。

本書は自殺という複雑な現象を誠実に分析し、個人単位、社会単位での実践的な自殺予防を解説する。個々人の自殺の原因は分からぬが、統計的な調査から自殺を引き起こす様々な要因が浮かび上がってくる。これらをまとめた「自殺潜在能力」、「所属感の減弱」、「負担感の知覚」という三つの要因を主軸に具体的な予防策が提案される。

本書の特色として、自殺を絶対悪だと拒絶せず、自殺は悪なのかと問い合わせがある。自殺の功罪を整理し、予防すべきでない自殺の在り方を提示する。一方で、現実の自殺はそうした理想的なものではない。こうした考察は自殺予防の必要性だけでなく、自殺を救済として神聖視したり、逆にタブー視する姿勢を崩し、冷静な視点も与えてくれる。(筏)

(一九一頁 税込八八〇円 6月刊)

若者による犯罪、その背景には――

「闇バイト」が連日世間を騒がせている。だが、闇バイトとは一体何か、なぜ闇バイトに手を出すのか、なぜ根絶できないのか……。

◆闇バイトの実態◆

こうした疑問を暴くべく、犯罪者の視点から事件を描いたのが『ルポ 特殊詐欺』(ちくま新書)である。不特定多数から現金等を騙し取る特殊詐欺の一種——闇バイトに手を染め、実行役を担うのは金銭的困窮者等だ。彼らは勤務初日に住所や顔写真といった個人情報を奪われ、家族を人質に取られ、脅され、闇バイトの継続を強要される。「とりあえず僕のことを捕まえてくれないですかね」、「もうずっと、怖くて、怖くて……。でも、家族を守りたくて……。」といった陳述が本書の随所に見られ、憔悴しきった姿が目に浮かぶ。実行役は現行犯等で捕まるが、暴力団が担う指示役は実行役に身元を明かさないため捜査の手が及ばず、捕まらない。近年の法改正により従来の資金源を断たれた暴力団にとって、実行役を新たに調達すれば資金を得られる特殊詐欺は渡りに船である。

◆立ち直らせるための少年法◆

ところで、特殊詐欺で立件された者の七割が三〇歳未満で、全体の約二割を一〇代が占めることを存じだらうか。罪を犯した一〇代には少年法が適用される(成人年齢引き下げに伴い一八・一九歳は「特定少年」という位置づけになったが少年法適用対象)が、この法律の入門書に『少年のための少年法入門』(旬報社)がある。罪を犯した場合どうなるのか、凶やケーススタディを用いて解説する。必要な教育やさまざまな支援を通して、



京大の宇治グラウンドのそばにある宇治少年院跡地を、私は横目に通り過ぎたことがある。当時の私のように、若者をはじめとする社会的弱者が抱える数多の問題を今の社会は素通りしている。犯罪を許してはならないが、著者が指摘するように、犯罪の背景には弱者が困窮状態に追い込む環境や社会構造がある。それを鑑みず、犯罪者になる前に被害から救おうともせず、罪を犯した事実にのみ注目する現状は適切だろか。読者諸君と考え続けたい。(前編)

罪を犯さない大人に成長してほしいという理念を基に少年法は作られている。よって、刑罰を主な目的とし、二〇歳以上に適用される法律とは性質が異なる。また、本書は「逮捕」といった聞き馴染みはあるが意味を深くは知らない用語も平易な言葉で説明し、これを読むだけでも学びがある。

◆加害者であると同時に被害者でもある非行少年◆

これまでざぶ紹介した本よりも、非行少年自体に重きを置いているのが『非行少年の被害に向き合おう!』(人文書院)だ。事件概要や

生育環境、下った判決、実践した支援とその後の経過を事例ごとに詳説する。本書によれば、非行少年の多くは虐待や性被害に遭っており、深く傷ついた心身を癒やす時間と環境が彼らには必要だ。傷が癒えれば自省し、立ち直ることができる。しかし、

厳罰化を求める現状ではさうした措置を取れない。非行を少年のSOSと捉え、救いの手を差し伸べ、更生する可能性——「可塑性」を信じ、少年法の厳罰化を早急にやめよと著者は社会に憤慨し、嘆願する。

*



私の本棚

わたし、境界線

今回は、線がシンプルで美しい漫画を。それでは早速。

★『A子さんの恋人』一～七巻

A子は二九歳の漫画家。彼女は大学生の頃から七年付き合ったA太朗との関係解消に失敗したままニューヨークに渡り、そこでアメリカ人の彼氏、A君ができ、プロポーズされ、返事を保留にしたまま日本へ帰国。彼女は一体どちらを選ぶのか。



簡潔に言うと三角関係の話なのだが、本作には重要な特徴がある。その一つが、登場人物の大半が「名前を失くしている」こと。本作では人物の名はアルファベットまたは平仮名で表記される。アルファベットや平仮名で記される名は、酷く固有性が低い。つまり本作の人物達は置き換える可能な存在として描かれていると言えるだろう。これは彼らが「固有の名前を取り戻す」物語なのだ。

特徴の二つ目は、「自分と相手の境界が消える恐ろしさを描いている」こと。作者はA子とA太朗の関係と、A子のデビュー作を作り、巧みに表現する。A子は大学四年の時描いたデビュー作に縛られ続けている。それは実はA子とA太朗の話を抽象化した物語。A太朗はA子の漫画の手伝いをしていた際、A子の描く線そっくりの線を描いた。まるでA子のコピーのようだ。A子は恐怖を覚える。コピーに追われるオリジナル。彼女は思う、「この人おかしいんじやないか?」でも彼女も知らずの内彼の影響を受けている。お互いに相手に強く憧れ、境界線が消えてきていたのだ。ただ一人が違うのは、A子は「あなたといふことは私は私ではいられない」とA太朗を置いて渡米したのに対し、A太朗は「君といつても僕は変わらないか?」でも彼女も知らずの内彼の影響を受けている。お互いに相手に強く憧れ、境界線が消えてきていたのだ。ただ一人が違うのは、A子は「あなたといふことは私は私ではいられない」とA太朗を置いて渡米したのに対し、A太朗は「君といつても僕は変わらないか?」でも彼女も知らずの内彼の影響を受けている。お互いに相手に強く憧れ、境界線が消えてきていたのだ。ただ一人が違うのは、A子は「あなたといふことは私は私ではいられない」とA太朗を置いて渡米したのに対し、A太朗は「君といつても僕は変わらないか?」でも彼女も知らずの内彼の影響を受けている。

い」と大学時代の部屋から出られず彼女を待ち続けた所。デビュー作はそこで終わり。沖まで泳いだ彼女は、海の底に沈みかけている彼を救い出そうとデビュー作の続きを求めていたのだ。そういうことが徐々に明かされる。誰かといても自分は自分であること、A子は英子だしA太朗は永太郎であること。その上で大切な人と一緒に生きていくには。もがき日々を股にかけ逃避しつつもデビュー作にピリオドを打った七巻は涙が溢れた。彼らの未来に光あれ。

★『ひとりの夜にあなたと話したい』一〇のこと

もうすぐ夜が来る。街が青く染まる時間。

その束の間が、好きだという。世界が美しく見える気がするから。そうだね、一瞬だけ別の世界と交わる幻想的などの時間より他の生き物との境界が狭まる気がするこの時間が、私も好きだよ。作者カシワイさんの優しい絵と言葉が詰まった読み手への手紙のような本。



「あなたと話したい」、読み手の言葉を待つててくれていると伝わってくるから、対話しながら読んでしまう。うれしい夜も、さみしい夜も、落ちつかない夜も、眠れない夜も、この本があればきっと大丈夫。一緒に大切な記憶の欠片を磨いたり、遠くの海のどん底に眠るクジラの骨を想ったり、あてもない夜の散歩に出たり、しようよ。

(黄丹)

編集後記

ご挨拶が遅くなりました。6月号から編集委員として参加している役です。精々数学の証明程度の文章(?)しか書いてこなかった私ですが、今年度からは綴葉の書評のおかげで文章を書く機会に恵まれています。綴葉の編集委員には理系を専門としている方が少なく、自身の専門性を活かして数理系の書評を増やせていけたら良いなと考えています。

さて、私は名前を考えるのが苦手で、特に絶えず変化していくものに名前を与えるのが非常に苦手です。ゲームで名前を決めるのではさえ苦悩していた時期があります。名前に意味やストーリー性を込めると、名付けた対象の変化を制限してしまうような気がするからです。しかし、名付けを放棄し、代名詞や種族名、番号で呼ぶというのはあまりにも非人間的なふるまいです。そこでほとんど意味の無い、適当に目についたものを名付けるようにしています。役もそうです。春に編集委員として誘われた時は白川疎水の桜を楽しみにしていたので、花役という単語を知り、花と言う柄でもないなと思い、役を選びました。

一方で綴葉という表題は非常にしっくりきており、名前負けしているような印象も受けません。このまま綴葉が綴葉たれるよう、頑張っていくのでよろしくお願ひします。(役)

当てよう！図書カード

お盆の風習は地域によって特色があつて面白いですね。京都では五山の送り火が有名ですが、私の出身地である広島では、他ではあまり見られないあるものをお供えします。お墓が非常にカラフルになるのですが、このあるものとは次の内どれでしょう？

- 1. 盆行燈
- 2. 盆灯籠
- 3. 盆風鈴
- 4. 盆風船

(役)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先(<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>)から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは9月15日です。



《5月号の解答》 5月号の問題の正解は、3.のエチオピアでした。左京区元田中にある「旅の音」さんという喫茶店のエチオピアのアイスコーヒーは絶品ですので、この夏に是非一度足をお運び下さい。図書カードの当選者は、うりこさん、とんとさん、こゆきさん、土曜の朝さん、のんきなネコさんの5名です。当選おめでとうございます。(浅煎り)

読者からひとこと

—— 読者のなかにも同志の方がいらっしゃるとは……！ 書評を書いた身としても報われる思いです。彼女の今後の活躍に期待！ ○毎号、表紙の写真を楽しみにしています (人間・環境学研究科・いんくに) —— 写真担当の委員も大変喜んでおります！ 季節や特集に合わせ、毎回魅力的な写真を撮ってくれる彼はまさしく『綴葉』の顔そのもの。来月号の表紙も楽しみに！ (浅煎り)

○春から京大にやつてきたのですが、生協で『綴葉』を目にした瞬間「わ！ 京大だ！」と美感が湧いてテンションが上がりました。これからも楽しみにしています。
 (人間・環境学研究科 なつ)
 —『綴葉』で京大らしさを感じていただき光榮です！ 編集委員も人文学から科学まで多種多様な京大生がおります。ぜひ『綴葉』とともにに素敵な京大ライフを！
 ○先日Aマップのオンラインライブ「滑稽」を観ました。笑いの中に社会への風刺や人生の滑稽さが溢れていて、洞察力の深さを感じました。加藤さんが文章を書かれていることを初めて知り、興味が湧いています。

(しおん)